

お伽草子の研究―木曾御嶽神社蔵『天狗の内裏』

人文学部文化コミュニケーション 日本語文化 日本文学専攻

瀧川治香

要旨

室町時代中頃に成立したと考えられる御伽草子『天狗の内裏』は、義経の生涯をまとめあげた、いわゆる判官物と称される物語の中でも、最も幼い頃の義経を主人公としたもので、地獄、修羅道、極楽をめぐる異界訪問譚、そして大日如来の語る牛若の未来記等によって構成される。その研究は進んでいるとは言えず、成立については解決を見ない。

本考察で取り上げる『天狗の内裏』は、長野県木曾郡王滝村にある木曾御嶽山への山岳信仰に基づく御嶽神社滝家が所蔵する折紙装丁のもので、一冊で構成される。成立年代は寛文六年（一六六六）であり、現存する江戸時代以降の写本としては比較的古い。

先に挙げた諸本に漏れず、他本との間には多くの特徴、差異がみられる。先行研究にみる様々な可能性を踏まえ、本論では、『天狗の内裏』を含めた諸本を比較する事で、それぞれの特徴を明らかにし、この本がどのような過程を経て、どのような目的で作られ、どのように読まれてきたのかを考察する。翻刻、語釈を行い、現存する諸本とそれに関する先行研究等を参考にしつつ、その本質を検証した。

その結果、木曾御嶽神社滝家が蔵する『天狗の内裏』は、現在確認できるとの伝本にも系統を同じくしない全く新しい系統の本である事が分かった。（以下【御嶽本】）この本は、古浄瑠璃本『常盤物語（仮題）』（以下【常盤物語】）の第六段目にその上巻部分が抽出されており、『常盤物語』がいくつかの舞曲や、御伽草子から、あれこれと取りあつめて、常盤御前と青少期の御曹司とのつながりを、広く大きく扱っている物語」とする、横山重の考察を補強する根拠の一つとなった。そして、重要で貴重な情報を多く示す『天狗の内裏』新系統の【御嶽本】は、木曾御嶽神社滝家に見られる祝詞や祭文といった多くの文書と特徴が一致し、それらの特徴が「声に出して読み上げる事を目的に作られた」であった事から、この【御嶽本】にも、祝詞や祭文などのように声に出して読み上げる事を目的として書き上げられた文書の一つであるという可能性を十分に考える事ができ、古浄瑠璃や御伽草子と呼ばれる成立過程の不明確な物語の、成立に至る過程の一可能性をこの本に見る事ができる、という結論に至った。